

「沈黙と祈り」

Ⅱ列王記 18:36-19:7

【1】序

このときエルサレムはアッシリアの大軍によって取り囲まれ、ラブ・シャケの巧みなことばが伝えられ、人々の神に対する信頼が揺るがされようとしていた。目に見える恐怖とともに語られることばには力があつた。信仰者はこの世にあっては苦難にあうように定められている（Ⅰテサロニケ 3:4）。しかし、私たちは真の支配者を忘れてはならない。神は、イスラエルの背きのゆえにアッシリアを裁きの杖として用い、ユダに対しても神への信仰を促すために今アッシリアの行動を許可しておられるのである。

【2】信仰者の沈黙

アッシリアの誘惑のことばに対してヒゼキヤはユダの民に沈黙を守るように命じた。それは主に従う信仰者にとって賢明な対応であつた。このとき、主への信頼が問われる。

沈黙は神を知るために必要なことである。ヒゼキヤは過去の失敗（Ⅱ列王記 18:15）とイザヤのことば（イザヤ 30:15）をもとに神の前に静まることを学んだのであろう。誘惑の中にある沈黙に靈的な戦いを見ることが出来る。状況に左右されることなく、主のことばのみに支配されている状態こそが聖靈に満たされている状態なのである。

【3】主の宮の中で

靈的戦いの中にいたヒゼキヤはラブ・シャケのことばを聞くと衣を引き裂き、粗布をまとい主の宮に入った（19:1）。このような行動は喪に服する者の悲しみや、嘆き、さらには悔い改

めの謙遜のしるしである。ヒゼキヤはこのとき鎧ではなく粗布をまとつた。彼は神の御前に立ち、信仰を表明したのである。主の御前にへりくだり、自らとユダの民が主を離れていたことを悔い改めようとしたのである。この時代イザヤとともにミカも主のことばを語つた（ミカ書 1:10-16）。このとき、彼らは主のさばきのことばを聞かねばならなかつたのである。

ヒゼキヤは神の名が汚されることを痛み悲しみ、これまでの自分たちの不信仰を悔い改めたのである。私たちも信仰生活の中で正しく主の責を受け止め、悔い改めへと導かれる必要がある。正しい罪責感が救いの喜びを確かなものとするのである。神は今のときの状況のすべてを知っておられる。そしてそれにふさわしい処置をなさる。このことを信じながらも私たちは信仰を同じくするものとともに祈るのである。

【4】あのことばを恐れるな

19:5-7 はヒゼキヤの訴えに対する神のことばである。ヒゼキヤの祈りは主に受け入れられた（6）。アッシリアは必ず滅びるのである。しかし、なおヒゼキヤの目に見えることは事態の改善ではなかつた。アッシリアの攻撃はエスカレートしていくように見えるのであつた。

私たちはよく状況が見えないまま、それでもなお主に信頼するしかなしえないことがある。目の前の状況に恐れをなし、右往左往することがある。しかし、私たちが恐れるべきは主ご自身である。私たちを不当に責め立てるものや、幸福を与えるものでもなく、真に信頼し、恐れるべきは主のことばである。この御方（おかた）に対する悔い改めは靈的成長の機会である。